

家政学における人間守護と政治学(IV)
 一家の守護性の補強の問題を通して—

郡山女大家政 影山 彌

今日、われわれが経験する社会は、一種の悲觀的ニュアンスをもち、多様な名辞のもとに特徴づけられる。機能的、合理的、官僚制的、匿名的、専門的、原子的、等々である。これらは底流において、社会・経済・政治的テクノロジーの発達による大社会の成立ちと複雑な構造分化に対応する。しかもこれには他の重要な側面として、間断的なあがたらしい人々の社会的移動と浮動を伴っている。ところで、こうした状況を人間に引きつけて言うならば、現代は不幸にも継続的に人間の合理化・孤立化・部分化・浮動化を社会内在的に促す可能性を潜めているといえる。さらに、哲学者の言葉を借りれば、実存主義的人間の時代、故郷喪失の時代、内面的根柢の時代となる。さて、仮りにこれらの包括的規定が現代人の本質をリアルに捉えているとしても、こうした緊張と不安と脅威の現実によって人間は人間であることが可能であろうか。答えは否であろう。逆に、このような現実を克服しようとする人間観が強く対峙されるべきである。先に閉口によって論述された、「家の守護性」—これがこの問題に答える中心概念であった。さらにまた、これが家政学を中心概念であるべきことも明らかにされたところである。今回の私の発表は、このような論脈を前提としつつ、家の守護性の本質を踏まえ、家の守護性の補強という観点から政治学が家政学の一領域学としてどのように関わるべきか、という問題について若干の具体的課題にふれながら論究しようとするものである。研究方法は文献による。